

ニューノーマルを考える

(公社) 日本透析医会

常務理事 安藤亮一

2020年、新型コロナウイルス感染症が世界中へ拡大したことにより、感染リスクを低減するため、人との接触機会を減らすことやソーシャルディスタンスを保つことなど、生活様式の大きな変容が求められており、ニューノーマル (New Normal) と呼ばれている。直訳すると「新しい常態」という意味になる。社会に大きな変化が起こり、変化が起こる以前とは同じ姿に戻ることができず、新たな常識が定着することを指す。ニューノーマルという言葉自体は、新型コロナウイルス感染症の発生よりも前の2000年初頭のネット社会の到来とともに始めて言われ、次の2009年のリーマンショック時に次いで、今回は第三の波ともいわれている。

医療の世界もニューノーマルが定着しつつあるといえる。感染対策をはじめとして、オンライン診療、オンライン会議・学会、医師の働き方などが注目される。透析の分野も例外ではない。

透析領域での感染対策として、透析前に患者の体調を事前に連絡・確認すること、シャントの穿刺・抜針など侵襲的な処置をする際のゴーグルあるいはフェースシールド、マスク、ガウン、手袋の装着などは、コロナ禍のなかで多くの透析施設が取り入れた。これらはコロナ感染がたとえ収束したあとでもニューノーマルになるであろう。また、オンライン診療やオンライン会議・学会もリアルに直接会う意味とは別の価値が見いだされたといえる。さらに、体調が悪くても医療関係者はなんとか自分の担当する患者のために無理をして働くという考え方も今後はなくなるということも含めて、働き方に対する考え方が変わってきたともいえる。

これらのニューノーマルの波は、コロナ禍も大きなきっかけではあったが、大きな時代の流れによる変化も少なくないと思われる。

感染対策に関しては、2020年5月に発刊された「透析施設における標準的な透析操作と感染予防に関するガイドライン (五訂版)」で、穿刺や返血などの侵襲的処置を行う際の、マスクや手袋に加えてゴーグルあるいはフェースシールド、ガウンなどの个人防护具は既に強く推奨されていた。コロナ前から、ガイドライン通りに厳密な感染対策をしていた施設にとっては、すべての患者に対して、穿刺・返血の際に上記の个人防护具をつけるのは当たり前のことであった。働き方改革に関しても、すでに2019年から政府の骨太の方針に沿って、推進会議で検討が進められていた。きっかけは、長時間労働にともなう過労死であり、医療界では、もっとも管理が及ばなかった医師の働き方改革が注目されていた。

コロナ禍は確かに、あらゆる分野で根底から考え方を変える百年から数百年に一度の大きな出来事であることは確かであるが、ニューノーマルをひきおこす時代の流れが底流としてあったといえるのではないかと思う。

透析医療においては、透析療法の選択、透析の開始や見合わせなどを患者、医療スタッフが一緒

に考えていく共同意思決定 (shared decision making; SDM), 生命予後などをアウトカムとしたエビデンスをもとにして治療方針を決めていく evidence-based medicine から, 患者自身の満足度をアウトカムとした患者中心のケア (patient centeredness) など時代の流れに沿ったニューノーマルといえる。

医療安全の分野でもニューノーマルの波がみられる。2022 年はじめに 2021 年 1 年間を対象に, 8 年ぶりに全国の透析医療施設を対象に「透析医療事故と医療安全に関する調査」が行われる予定である。日本透析医会医療安全対策委員会医療事故対策部会の委員長の関係で, この調査を担当させていただくことになったが, 医療安全に関しても, うまくいかなかったインシデント・アクシデント事例の分析が中心だった Safety-I という考え方だけでなく, うまくいっている日常の業務に注目し, 事故を未然に防いだポジティブインシデント事例やグッドジョブ事例を報告する Safety-II などとも一種のニューノーマルとも考えられる。

透析医は, 透析領域における様々なニューノーマルを踏まえて, 時代のニーズに応じて, より良い透析ができるようにしていくことが求められている。